

『源氏物語』の翻訳について*

松 永 巖

1. 多様な訳

「翻訳する」とは、ある言語で表現された文章の内容を他の言語に直す行為であるということができますが、訳そうとする原文の種類によって翻訳の方法も異なってきます。例えば科学的なものであれば一字一句正確に訳さなければなりません、文学作品の場合は、そうばかりとも言えないようです。翻訳しようとする原文の読み方により、即ち原文をいかに読み、いかに解釈するかによって異なった結果になることもあります。ここに興味深い実例がありますのでご紹介しましょう。

以下の例文は野村忠央先生（和光大学表現学部文学科）のホームページから借用したものです¹。

- (1) 「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」（一般的とされる訳）
- (2) 「死ぬるが増しか、生くるが増しか、思案をするのはここぞかし」（外山正一 1882年）
- (3) 「世に在る、世に在らぬ、それが疑問ぢゃ」（坪内逍遙 1909年）
- (4) 「生きるか、死ぬか、そこが問題なのだ」（市河三喜・松浦嘉一 1949年）
- (5) 「生か、死か、それが疑問だ」（福田恆存 1967年）

* 本稿は筆者の最終講義（2006年1月28日、於：和光大学Jホール）での発表内容に加筆・修正を加えたものである。当日、発表の内容に有益なコメントをいただいた会場の方々及び最終講義を開催して頂いた和光大学、和光大学経済経営学部に記して感謝申し上げる。

(6) 「やる、やらぬ、それが問題だ」(小津次郎 1968年)

(7) 「このままでいいのか、いけないのか、それが問題だ」(小田島雄志 1972年)

ハムレットの有名な台詞、‘To be or not to be; that is the question.’の日本語訳です。訳された時代も違いますが、いろいろな表現があります。どれが一番正確かということは一概には言えません。ここには‘to be’が提示されているだけで、主語も修飾語もなく、「誰が何処に」とか「何がどのように」と言った説明はありません。「存在」そのものが問われている高度に抽象的な表現になっています。これをそのまま「ある」と文字通りに訳しても読者を戸惑わせることになってしまうでしょう。読者は具体的に説明されて納得するものですから。(3)の坪内逍遙の訳は「世に在る」となっていて、「世に」という説明がなされています。「この世に」となっていないところにまだ十分には具体化されていないと見ることができます。坪内逍遙の‘be’の抽象性へのこだわりがあったのでしょうか。それともリズムの関係で「この」を入れなかったとも考えられます。それにしても(2)、(4)、(5)に比べれば抽象性の高い訳になっています。(7)の小田島訳もこれに近いようですが、語数も多く力強さが感じられないようです。他の訳はどうか、storyの中で見てみましょう。

ハムレットは、父王の死後一カ月もしないうちに母親が父の弟、現在の王と結婚してしまったことで、「自殺を大罪とする神の徒がなくなア！」(坪内逍遙訳)と嘆き悲しみます。さらに、父王の亡霊が現れ、「聞いた上は、必ずともに、復讐を忘るまいぞ」(坪内逍遙訳)と言って、弟が自分を毒殺した事の顛末を語ります。‘To be or not to be; that is the question.’はこのような苦しみの中でのハムレットの独白です。(2)、(4)、(5)の具体的に「生、死」とした訳も、(6)の「やる、やらぬ」とした訳も、どちらもハムレットの心情を十分にくみ取った訳と言えます。

同じ原文でもいかに読み解くかによって翻訳もそれぞれに異なったものになってきます。前置きが少し長くなりましたが、「抽象性」については、3.4節『源氏物語』の英訳の文体的特徴のところでまた触れることになるでしょう。

2. 『源氏物語』の現代語訳

次に、本題の『源氏物語』の訳を見てみましょう。まず、日本語の現代語訳を見てみようと思います。『源氏物語』の原文への対処の違いから対照的な現代語訳になっている与謝野晶子と円地文子を取り上げます。

2.1. 与謝野晶子訳と円地文子訳

まず『源氏物語』の原文の用例を挙げ、次に与謝野晶子訳、円地文子訳を挙げてそれぞれについて検討していきます。それぞれの用例文の最後の括弧内の数字は文の最初の文字の位置を示すテキストの頁数と行数です。またこれ以後の用例の下線は全て筆者によるものです。

(8) 例1. [『源氏物語』の原文]

御つばねは桐壺きりつばなり。あまたの御方かたを過ぎさせ給ひつゝ、ひまなき御前まへわりに、人の御心こころを盡くし給ふも、げに「ことわり」と見えたり。まう上り給ふにも、あまりうちしきる折をりは、打橋・渡殿うちはしわたのこゝかしこの道に、あしき業をしつゝ、送り迎おくむかへの人の衣きぬの裾すそ堪たへがたう、まさなきことゞもあり。(桐壺29-8)

(9) [例1の与謝野晶子訳]

住んでいる御殿ごてんは御所ごしょの中の東北すみの隅すみのような桐壺きりつばで在った。いくつかの女御にみや更衣えいたちの御殿ごてんの廊ろうを通い路みちにして帝みかどがしばしばそこへおいでになり、宿直しゆくちくをする更衣えいが上がり下がりして行く桐壺きりつばであったから、始終しじうながめていねばならぬ御殿ごてんの住人すまひたちの恨みかみが量かきんでいくのも道理道理と言わねばならない。召めいされることがあまり続くころは、打ち橋うちはしとか通い廊下ろうかのある戸口かどぐちとかに意地いぢの悪い仕掛けしかけがされて、送り迎おくむかえをする女房にぼうたちの着物きものの裾すそが一度でいたんでしまうようなことがあつたりする。(8-5)

(10) [例1の円地文子訳]

御所ごしょでこの方の賜たまひわっているお住居すまひは桐壺きりつばであった。帝みかどのお常御殿じょうごてんである清涼殿せいりょうてんからは遠く離れて、東北すみの隅すみに当たる。多くの女御更衣にみえいの住まわられる部屋へや々々の前まへを素通りすどおりなさって、帝みかどが桐壺きりつばにばかり通かみっていらしやることが始終しじうのようであつて見れば、その道筋みちすぢの御ご

す 簾の蔭じに疑しつと身をひそめ、息を殺している女人たちの眠あやっているよ
うな細い目の芯しんに眸ひとみがどんなに妖しく玉虫色に燃え立っていたか。ふ
くらんだ御簾竹の黄色い小暗さを押して葡萄染えびぞめや蘇芳すおう、萌黄もえぎなどの色
濃い織物が、長い黒髪くろかみにまつわれ、涙で滲にじんでどんなに気味悪くう
ごめいていたか。思えば無理もないことと言わねばならぬ。桐壺から
御息所が清涼殿へ上るおりに、お召しきしがあり頻る時には、打橋うちはしや
渡殿わたのなど、通り道のあちらこちらに不浄なものを撒まき散らして置いた
りして、お供の女房はかまたちの袴うちぎや桂すその裾すそを台なしにしてしまうような怪
しからぬ悪戯わるきをしかけたりもする。(19-5)

帝と桐壺の更衣がお互いの部屋に通うとき多くの女御更衣の部屋の前を通らなければならない。その時の女御更衣の心情や行為が述べられています。そここのところの描写は与謝野訳では何の飾りも無く淡々としています(下線部分)。これに対して円地訳では、連綿と女の情念が綴られていて、気味悪く恐ろしい程です。翻訳でここまで潤飾が許されるのかという問題はありますが、女の妖しい性や業を追求する作家であれば、さもあるうと思われると同時に、一読者として桐壺の更衣や他の女性たちへこれほどにまで深く感情移入ができるものかと驚かされます。翻訳者の原文との関わり方、深い読みと、そして登場人物への極度の感情移入が翻訳に反映されているのが、円地訳と言うことができます。与謝野訳では原文に添って簡潔に表現されています。

円地文子は『源氏物語』を訳するにあたって、『源氏物語(巻一)』の序文の中で自らの心情を次のように述べています。

- (11)「桐壺の更衣、光源氏、藤壺の宮、六条御息所、空蝉などの内部にたち入って、本文では美しい紗膜のうちに朧に霧りかすんでいる部分に照明を与えているのは、私自身が『源氏』を読んでいるうちに自然にそこまでふくらんでいかなければならなかった止むを得ない膨張なのであって、こうした加筆を古典に対する礼を失した態度と見る読者もいるかも知れない。しかし、私は気を銜はらったり、原作を歪曲したりするためにこの加筆を行ったのではない。『源氏』を読んでいる間に、それらの部分ぶつに来ると、いつも憑つかれたたように自分のうちに湧き立

ち、溢れたぎり、やがて静かに原文の中に吸収されてゆく情感をそのまま言葉に移して溶かし入れなければいけないままにそうしたのである。

ここでは、一読者として源氏物語を読み始め、やがて作家魂に揺さぶられてペンを走らせる翻訳者の姿が想像できます。

2.2. 両現代語訳の文体的特徴

『源氏物語』の原文を挙げ、次に与謝野晶子訳、円地文子訳を挙げて検討することにします。夕顔の巻の幽霊が出る直前の場面です。

(12) 例2. [『源氏物語』の原文]

日たぐる程に、起き給ひて、格子手づから上げ給ふ。いと、いたく荒れて、人目もなく、はるばると見渡されて、木立、いと、うとましく、もの古りたり。け近き草木などは、殊に見所なく、みな秋の野らにて、池も、水草に埋もれたれば、いと、けうとげになりける所かな。(夕顔143-15)

(13) [例2の与謝野晶子訳]

源氏は昼ごろに起きて格子を自身で上げた。非常に荒れていて、人影など見えずにはるばると遠くまで見渡される。向こうのほうの木立は気味悪く古い大木に皆なっていた。近い植え込みの草や灌木などには美しい姿もない。秋の荒野の景色になっている。池も水草でうずめられた凄（すこ）いものである。(106-4)

(14) [例2の円地文子訳]

日も高くなった頃お起きになって、格子を御手ずからお上げになった。広い院の庭も今はひどく荒れ果てて、人影もなくはるばると見渡されるが、木立は気味悪いほど鬱蒼（うつそう）と茂り合い、目の前の前栽（せんざい）の草木などは生（お）いるままにまかせて、一面秋の野づらの有様である。池も水草に埋（うと）もれて水の色も見えない始末、ほんとうにいつの間にもこうも疎ましい所になってしまったのだろう。(189-11)

句点が円地訳には3個なのに対して、与謝野訳では6個使われています。

短い文が多く使われ、話しがテンポよく先へ先へと進んでいきます。円地訳のゆったりした語り口とは対照的です。そのような与謝野訳の文体の特徴は、一つのsentenceが短いことに加え、主語の使用が多いことです。これは一つには敬語の使用とも深い関係があります。

『源氏物語』では主語や目的語が表に出ないことが多いのですが、敬語によってそれと分かるから不要であると言われます。与謝野訳は、その敬語の使用が極端に少ない。必然的に主語が多く使われることになります。(13)の例文では主語が源氏であっても敬語が使われていません。またこれに続く源氏と夕顔のやりとりの場面でも次の例文のように敬語は使われていません。

(15) 例3. [(13)の部分に続く与謝野晶子訳]

「気味悪い家になっている。でも鬼なんかだって私だけはどうともしなかろう」と源氏は言った。まだこの時までは顔を隠していたが、この態度を女が恨めしがっているのを知って、なんとる錯誤だ、不都合なのは自分で在る、こんなに愛していながらと気がついた。(106-9)

このように、敬語の用法が極めて少なく、原文では主語がないために意味が曖昧になるような所でも、与謝野訳では文意が明確になっています。現代小説の文体を用いて読み易くなっています。読み物に対してリズムを重視するサイデンステッカーは日本語現代語訳の中で一番好きなのは、独立した読み物として与謝野訳だと言っています。すらすら読めるからというのがその理由です。

円地訳は、敬語を適度に使い、その分主語を少なく、与謝野訳に比べるとリズムはゆるやかになっていて、原文に近いようです。しかし現代語で訳する時はどうしても説明を加えることも必要になります。完全にリズムが一致するということは不可能でしょう。伊井春樹氏は「サイデンステッカー氏に訊く」という座談会で、『源氏物語』は、当時言葉で語るように音読されていた。しかし黙読されるようになった現代語からはリズムはなくなってしまった²と述べています。なめらかな、耳に心地よいリズムは原典で味わうしかないのかも知れません。

3. 『源氏物語』の英語訳

これまで二人の対照的な現代語訳をあげましたが、『源氏物語』の英訳ウェイリー訳とサイデンステッカー訳にも冗長さや簡潔さという特徴を見ることができます。次に、ウェイリー訳とサイデンステッカー訳を検討していきます。その前に、まず、二人の略歴、業績を見ることにします。

3.1. ウェイリーとサイデンステッカーの略歴、業績

(16) ウェイリー (Arthur D. Waley 1889 ~ 1966)

- 1889 イギリス タンブリッジ ウェルズに生まれる
- 1903 ラグビー校入学
- 1907 ケンブリッジ大学 キングズカレッジ入学
- 1913 大英博物館に就職
- 1918 *A Hundred and Seventy Chinese Poems* 出版
- 1919 *Japanese Poetry The 'Uta'* 出版
- 1921 *The No Play of Japanese* 出版
- 1925 *The Tale of Genji* (volume 1) 出版
- 1926 *The Sacred Tree* (volume 2) 出版
- 1927 *A Wreath of Cloud* (volume 3) 出版
- 1928 *Blue Trousers* (volume 4) 出版
The Pillow-Book of Sei Shounagon 出版
- 1929 大英博物館退職、著作活動に専念
The Lady Who Loved Insect 出版
- 1932 *The Lady of The Boat* (volume 5) 出版
- 1933 *The Bridge of Dreams* (volume 6) 出版
- 1945 ケンブリッジ大学名誉会員となる
- 1947 ロンドン大学名誉講師に任命される 中国詩担当
- 1953 Queen's Medal を贈られる
- 1959 日本政府より The Order of Merit of The Second Treasure を贈られる

(17) サイデンステッカー (Edward G. Seidensticker 1921 ~)

- 1921 2月11日 アメリカコロラド州に生まれる

- 1942 コロラド大学卒業
 10月 海軍日本語学校（ボルドー）に入学
- 1945 2月 ハワイから硫黄島へ
 9月 ハワイから佐世保へ
- 1946 コロンビア大学大学院入学 日本文学を学ぶ
- 1948 外交官として横浜へ
- 1950 東京大学大学院入学
- 1955 上智大学講師（～1959）
 『蜻蛉日記』の英訳出版
- 1962 スタンフォード大学准教授（～1966）
- 1966 ミシガン大学教授（～1977）
- 1976 『源氏物語』の英訳出版
- 現在 コロンビア大学名誉教授、メリーランド大学文学博士
 その他の日本文学の英訳
 『伊豆の踊子』、『雪国』、『山の音』、『美しい日本の私』 一川端康成
 『蓼喰ふ虫』、『細雪』 一谷崎潤一郎

ウェイリーの履歴に関しては、業績として日本文学の翻訳を挙げましたが、一点だけ漢詩の英訳 *A Hundred and Seventy Chinese Poems* を挙げています。彼の著作活動はこの本から始まり、これ以後漢詩や日本の古典を精力的に翻訳していきます。その業績によって、1953年に Queen's Medal を贈られ、1959年には日本政府から The Order of Merit of Second Treasure が贈られました。

サイデンステッカーは日本文学の翻訳者として有名で、特に『山の音』、『雪国』などの英訳は川端康成のノーベル賞受賞に貢献したと言われていいます。1976年『源氏物語』の英訳が出版されます。和光大学文学科の源氏物語複数講義でもさっそく取り入れました。当時はウェイリーの英文に慣れ親しんでいて、個人的には、簡潔なサイデンステッカーの文体に戸惑うと同時に、もの足りなさを感じていました。

3.2. ウェイリー訳とサイデンステッカー訳

それでは、例1 (= (8)) の原文を二人はどのように英訳しているか、見

ることから始めてみましょう。英文には直訳的な日本語訳を付記します。

(18) [例1のウェイリー訳]

Her lodging was in the wing called Kiritsubo. It was but natural that the many ladies whose doors she had to pass on her repeated journeys to the Emperor's room should have grown exasperated; and sometimes, when these comings and goings become frequent beyond measure, it would happen that on bridges and in corridors, here or there along the way that she must go, strange tricks were played to frighten her or unpleasant things were left lying about which spoiled the dresses of the ladies who accompanied her. (8-25)

[彼女の住まいは桐壺と呼ばれる一翼にあった。彼女は、帝の部屋へたびたび通って行く時、多くの婦人の部屋の前を通らなければならなかった。そのような時、その婦人たちが激怒するのは全く当然のことだった。しばしば、このような往来が度を越えて頻繁に行われるような時、彼女が通らなければならない橋や廊下のあちこちに彼女を驚かすために奇異ないたずらが仕掛けられていたり、彼女のお供をする女性たちの服を台無しにしてしまうような不愉快なものが置かれていた。]

(19) [例1のサイデンステッカー訳]

She lived in Paulownia Court. The emperor had to pass the apartments of other ladies to reach hers, and it must be admitted that their resentment at his constant comings and goings was not unreasonable. Her visits to the royal chambers were equally frequent. The robes of her women were in a scandalous state from trash strewn along bridges and galleries. (4-27)

[彼女は桐壺に住んでいた。帝は彼女の部屋に行くのに他の女性たちの部屋の前を通らなければならなかったので、彼の頻繁な往来に対する彼女たちの憤りは当然であると認められなければならない。彼女も帝の部屋を頻繁に訪ねた。彼女の付き添いの女性たちの服は橋や廊下にはらまかれた汚いものでひどい状態になった。]

文体的に見てみるとウェイリー訳の英文はちょっと古風で重々しい感じ

がします。関係詞と接続詞が多く使われ、全体が二つの sentence で構成されていて、二つ目の sentence が長くなっています。これは主語の取り間違いにもよります。原文では2番目の sentence の前半の動作主体は帝であり、後半は桐壺になっているところを、ウェイリーは前半も桐壺にしています。内容については、原文の意味を正しく写し取るために言葉を多く用い、具体的に説明しようとしています。例えば、原文の後半「打橋・渡殿のここかしこのみちに、あやしき業をしつつ」とある所で、「ここかしこの道」を ‘here or there along the way that she must go’ として「ここかしこ」も「道」も訳出していますし、さらに原文にはないのですが、‘that she must go’ 「彼女が通らなければならない」と説明をつけています。また「あやしき業をしつつ」も訳出しており、下線を施した部分も関係代名詞を用いて説明しています。それに対して、サイデンステッカー訳の英文はリズムがあり、軽やかです。ウェイリー訳に比べると、省略されている箇所もあり、原文には在っても、説明がくどいようなところは訳出されていないようです。ウェイリー訳で原文の字句を丁寧に英語に置き換え読者が理解し易いように解説まで加えている箇所も、「彼女の（付き添いの）女性たちの服は橋や廊下にはばまかれた汚い物でひどい状態になった」と簡単に処理されています。このように二人の翻訳には、翻訳に対する考え方に大きな違いがあります。

3.3. 『源氏物語』英訳の特徴

ウェイリーとサイデンステッカーの翻訳論の大きな相違点は「感情」表現の処理の仕方に在ると言えます。まず二人の見解を聞いてみましょう。

ウェイリーは、文学作品の翻訳は文法的意味と同時に感情を伝えることが必要だとして、次のように言っています。

- (20) 原作者はその作品に自分の感情一憤激、哀れみ、喜び一をもり込んでいる。そのような感情は作者の文のリズム、強調、的確な単語の選択によって示されている。もし翻訳者が原文を読むとき、なにも感じないでただ単に一連のリズムのない辞書の意味だけを連ねるとしたら、彼は「忠実」だと考えるかも知れないが、実は原文を全く誤って伝えることになる³。

翻訳者のすべきことは、原文で表現されている原作者の「感情」を正確に読み取り、それを読者に正確に伝えることであると考えています。

一方、サイデンステッカーは感情表現について、彼の著書『湯島の宿にて』（蝸牛社）の中で、「作者が説明してくれるより、人物が自分で話し、行動してくれる方がむしろよい」と言っています。これは『源氏物語』の原作者への言及ですが、実際、サイデンステッカー訳では原文の感情表現が薄められ、控えめな表現になったり、省略されている場合もあります。

例文を見てみましょう。

(21) 例4. [『源氏物語』の原文]

夜なか、うち過^すぐる程になむ、絶えはて給ひぬる」とて、なき騒げば、御使も、いとあへなく^{つかい}て、かへりまゐりぬ。きこしめす御心まどひ、何事も思し召しわかれず、籠りおはします。(桐壺32-1)

桐壺の更衣が宮中から退出した夜、夜中になって亡くなり、その知らせを受けた帝の様子が述べられています。

(22) [例4のウェイリー訳]

...and soon after midnight announced that this time on arriving at the house they had heard a noise of wailing and lamentation, and learned from those within that the lady had just breathed her last. The Emperor lay motionless as though he had not understood. (9-37)

[それからやがて、夜中過ぎになって、今回その家に着いたとき、使者たちは悲嘆にくれ泣き叫ぶ声を聞いた。それで、家の中にいる人たちの様子から更衣が最後の息を引き取ったことを察知した。帝は何も分からないかのように、身動きもせず横たわっていた。]

(23) [例4のサイデンステッカー訳]

...The man arrived to find the house echoing with laments. She had died at shortly past midnight. He returned sadly to the palace. The emperor closed himself up in his private apartments. (6-21)

[その使者が着くと、家では嘆き悲しむ声が響きわたっていた。更衣は夜中を少し過ぎたころ亡くなっていた。使者は悲嘆に暮れて宮殿に

帰ってきた。帝は自室に閉じこもってしまった。]

(18)、(19) で見たように、ここでもウェイリーは原文に沿った訳を試みています。とは言っても原文を正確に訳出している訳ではありません。二人ともに言えることですが、ウェイリーは「いとあへなくて、かへりまいりぬ。きこしめす」を省略し、サイデンステッカーでは「きこしめすおんころもどひ、なにごとも思し召しわかれず」が訳出されていません。使者についても、ウェイリーが複数、サイデンステッカーは単数にしています。

まず感情表現として、更衣が亡くなってその家の人たちが悲しんでいる場面の描写を見てみましょう。原文では「なき騒げば」となっています。ウェイリーは‘wailing and lamentation’としてその場の悲しみの深さを伝えようとしていて、原文よりも強い表現になっています。サイデンステッカーは‘laments’と訳していて、原文よりも控えめな表現になっていると言えるでしょう。感情表現の程度の濃淡についてはここに見られるような傾向が二人の英訳全般について言うことができます。

前述の二人の意見を念頭に置いて、この用例の最後の部分を検討してみようと思います。原文では次のようになっています。現代語訳を添えました。

(24) 「きこしめす御心まどひ、何事も思し召しわかれず、籠りおはします」
(それとお聞きになる帝は、お心も顛倒して、何も彼も分別をつけることもおできになれず、引き籠っていらっしゃる。—今泉忠義訳)

ウェイリーは、「きこしめす」を省略し、「御心まどひ、何事も思し召しわかれず、籠りおはします」の箇所を‘The Emperor lay motionless as though he had not understood’と訳しています。「思し召しわかれず」を文字通り‘he had not understood’としているとも考えられますが、‘lay motionless’と合わせて考えると、ショックがあまりにも大きい時、人は意識を失い倒れてしまうこともあり、この時の帝の受けたショックはそれほどにまで大きかったと理解したのかも知れません。原文とは意味のずれはありますが、この英文の読者は、さもあろうと納得することでしょう。

サイデンステッカーは、まさしく自らの理論に従って、単純明快に、帝に行動させています。「使者が帰ってくる」次の瞬間、もう帝は「自室に閉じ籠って」しまいます。使者の言葉も聞いていません。読者は帝の姿を想像し同情することになります。

サイデンステッカーの文体の特徴がよく出ている例文をもう一つだけ挙げます。

(25) 例5. [『源氏物語』の原文]

日高くなれど、起き上^おがり給はねば、人々あやしがりて、御粥^{かゆ}など、そゝのかし聞ゆれど、苦し^{くる}くて、いと、心細^{おぼ}く思さるゝに、… (夕顔 155-5)

(26) [例5のサイデンステッカー訳]

The sun was high and still he did not emerge. Thinking it all very strange, the women pressed breakfast upon him. He could not eat. (74-43)

[太陽は高く昇っていた。それでも彼はまだ部屋から出てこなかった。女房たちは非常に不思議に思い、彼に朝食を差し出した。彼は食えることができなかった。]

この例でも、「苦しさ」、「心細さ」は省略し、原文にはない表現‘He could not eat’を付加して、人物の行動だけで源氏の心情を読者に感知させようとしています。

サイデンステッカー訳はテンポの早い簡潔な英文で書かれています。それだけに、登場人物の心情にまで入って行くためには、想像力を働かせ、慎重に読むことが求められるようです。

3.4. 『源氏物語』英訳の文体的特徴

ウェイリーの動詞を中心にした構文とサイデンステッカーの名詞を中心にした構文は対照的です。動詞中心の文は調子が穏やかで、表現が具体的になります。一方名詞中心の文はリズムがあり、テンポが速く、表現は抽象的になります。

例文を見てみましょう。

(27) 例6. [源氏物語] の原文]

いみじきもののふ、^あた^かた^き仇、敵なりとも、みては、うち笑まれぬべきさま
のし給へれば、えさしはなち^{たま}給はず。(桐壺43-8)

(28) [例6のウェイリー訳]

The roughest soldier, the bitterest foeman could not have looked on such a child without a smile, and Kokiden did not send him away. (15-26)

[一番あらあらしい武士も、もともと冷酷な敵兵もそのような子供を見るとほほ笑まないではいられなかっただろう。そして弘徽殿の女御は彼を離さなかった。]

(29) [例6のサイデンステッカー訳]

Not the sternest of warrior or the most unbending of enemies could have back a smile. Kokiden was reluctant to let him go. (13-35)

[武士の厳格さも、または敵の頑固さもほほ笑みを押し止どめておくことはできないだろう。弘徽殿の女御は彼を帰そうとしなかった。]

(29) は形容詞が名詞化されていて、それが主語になって居ます。いわゆる無生物主語文になっています。warrior, enemiesの属性であるsternest, most unbendingが中心語となって、ウェイリーの人物中心の文に比べると、強い印象を与えています。

最後に、次の例文を見てみましょう。

(30) 例7. [『源氏物語』の原文]

世にあるものと尋ね知りたまふに付けて、涙ぐみて、さらに例の^{れい}動^{どう}なきに、(明石77-15)

(31) [例7のサイデンステッカー訳]

Notice from such supreme heights had the perverse effect of reducing her to tears and inaction. (259-14)

[そのような最高の地位にある人から気付かれてしまったことは、彼女をいこじにさせる結果となり、彼女は涙にくれ、なにも出来なかった。]

明石の君が源氏から二度目の手紙をもらって、返事が書けず、困惑し、涙

にくれている一節です。これまで『源氏物語』の文体には言及して来ませんでしたが、(30)の例では、この例文の最後の「…動なきに」に続いて、「せめて言われて、残らずしめたるむらさきの紙に、墨づき、濃く薄くまぎらはして、(歌) 手のさま書きたるさまなど、やんごとなき人に、いとう劣るまじう上衆めきたり。」という語句が続いています。日本語には、接続助詞：て、に、や副助詞：などがある為に話し言葉では切れ目なく、いくらでも文を続けることができます。このような文を古田拡氏は連綿体と呼んでいます⁴。『源氏物語』の文はこのように連綿体で長々と続いている場合が多いのですが、助詞でくくられた一つ一つの表現は簡潔になっています。(30)の例文を見ると動作主体の省略はもちろん、感情的な修飾は全くありません。最後は「動なき」で終わっています。文全体は連綿体ではありますが、個々の表現を見れば、簡潔な文体になっています。サイデンステッカーは、原文に忠実であろうとし訳文の文体や語いの選択にも最大限の注意を払い、それに成功していると言うことが出来ます。「動なき」を *inaction* と文字通りに訳し、*reduce* の使い方も *tears*, *inaction* の状態へ彼女を「落ち入らせる」として、二つの名詞をうまくすくいあげています。また主語のとり方も正しく、内容も正確に訳しています。

4. まとめ

ここまで『源氏物語』の現代日本語訳と英語訳をそれぞれ二人の訳について、例文を挙げながら見て来ました。

ウェイリーの潤色の多い英訳に対して、女性の心理描写で訳文を膨らませ説明を加えて行く円地文子訳を、簡潔なサイデンステッカー訳に対しては、簡潔な表現でたんたんと物語を続けて行くような印象を与える与謝野晶子訳を取り上げました。もちろん簡潔さや潤色という点ではある程度の共通点はあるにしても、それはほんの一部であり、翻訳者の数だけ異なった訳が生れ、どれ一つとして同じものは無いと言えます。

これまで見て来た四人の翻訳から、翻訳をする行為とは何か考えさせられます。それぞれ四人の翻訳姿勢、翻訳理論を知り、それぞれの例文の検討をして来た結果から、翻訳は訳者が原典をいかに読み解き、それをいかに自らの言語で表現するかと言う膨大なエネルギーを要する作業だと言う

ことが出来ます。そのようにして生れた四人の訳のそれぞれの特徴を見ることにします。

円地文子訳は、女性の心理描写に優れ、円地自身の現代小説を読んでいるような楽しさがあります。与謝野晶子訳は簡潔な文体で、たんとと話しは進められています。主語が明確で敬語を最小限にとどめていて読み易く、他の現代日本語訳では、「桐壺」の巻から「夢の浮橋」の巻まで読み通すには大変な労力と時間を要しますが、与謝野訳ではそれほど苦勞しないのでそれが可能です。ウェイリー訳は英語の構文が複雑ですが、文法を正しく適用して読めば、それほど難しくはありません。和歌は散文文化されているのが多く、内容も分かり易い。サイデンステッカー訳は簡潔で力強く、テンポもよく音読するのに良く、あまり文法にこだわらず単語を直線的に追いながら意味を理解して行く楽しさがあります。文体的にも内容的にも原典に忠実な訳になっています。

注

1. 和光大学表現学部旧文学科ホームページ「のむらの受験英語ワンポイント講座」第17回（2006年12月17日）より。野村氏は現在、北海道教育大学旭川校に異動されているが、現在でも「のむらの受験英語ワンポイント講座」はインターネット上で閲覧可能である。

なお、本文（1）～（7）の引用部分の後、野村氏は以下のように記述されている。

- (i) 『ハムレット』の内容からすると、①生か死か、②復讐をすべきか、③この状況のままでいいのか、の3種類に大別される気がします（私は専門家ではありませんので断言はできませんが）。それで、(7)の小田島先生の訳なんか、出た時、みんななるほどと思ったのではと想像するのですが、青山学院大学のThomas W. Dabbs先生というShakespeareがご専門の先生といつかこの話になったところ、(4)の坪内訳（最初にShakespeare全作品の翻訳に取り組んだのは坪内逍遙です）が一番いい日本語訳だと言われました。それもなるほどと思いました。ダブズ先生のコメントは以下のようなものでした。

The best translation below that I see is Tsubouchi Shoyo, because it is the most abstract. Hamlet is not talking specifically about one thing (death, revenge, his current condition) but about the value of being (should we even exist at all). Highly philosophical at this point in the speech, and in

keeping with Hamlet's educational background in Germany. He becomes more specific later when he does talk about death, revenge, and his current condition, but not in the "to be or not to be" line.

(URL: <http://www.wako.ac.jp/bungaku/teachers/nomura/nomura017.html>)

2. 伊井春樹 『世界文学としての源氏物語—サイデンステッカー氏に訊く』、p. 107、笠間書店、2004.
3. 1958年11月発行の *The Atlantic Monthly* に発表したウェイリーの論文 “Note on Translation” の一節（松永巖訳）。
4. 1975年9月1日発行の『和光大学人文学部紀要』 「『源氏物語』の複数講義から」 A-1 「Waley 訳のわかりやすさと助詞の問題」（古田 拡）

テキスト

紫式部 『源氏物語（巻一）』 円地文子訳（1978）. 新潮社.

紫式部 『全訳 源氏物語』 与謝野晶子訳（1978）. 角川書店.

山岸徳平（1970a）『日本古典文学大系 14 源氏物語一』 岩波書店.

山岸徳平（1970b）『日本古典文学大系 15 源氏物語二』 岩波書店.

Murasaki Shikibu, *The Tale of Genji*, Arthur Waley's Translation (1971). Charles E. Tuttle Company.

Murasaki Shikibu, *The Tale of Genji*, Edward G. Seidensticker's Translation (2002). Tuttle Publishing.

参考文献

伊井春樹（2004）『世界文学としての源氏物語—サイデンステッカー氏に訊く』 笠間書院.

今井卓爾他編（1992）『近代の享受と海外との交流』（源氏物語講座9） 勉誠社.

古田 拡（1975） 「『源氏物語』の複数講義から」 A-1 「Waley 訳のわかりやすさと助詞の問題」 『和光大学人文学部紀要』 和光大学人文学部.

古田 拡他（1980）『源氏物語の英訳の研究』 教育出版センター .